

教育実践方法学会に熱い期待を込めて

京都文教大学 寺田 博幸

1 教育現場が元気であってほしい!

2020 年度にも本格化する学習指導要領の全面改訂について、下村博文文部科学大臣は、2014 年 11 月 20 日、「中央教育審議会」に諮問した。子どもが主体的に学ぶ方法を導入し、資質を育むため学び方としての「アクティブ・ラーニング」を検討していくことを求めたのである。

諮問された課題はどれももったもなしの内容であり、これからの社会を支える子ども達にしっかりとした学力を身に付けさせ、社会や生活に活用できる力を育んでいくことは大切なことである。

教育改革を進めていく上で、考えたいことがある。

教育現場では、よく管理職のリーダーシップが問われるが、根本は、子どもを指導する個々の教師の力を引き出し、組織的に協働して教育課題に立ち向かうことができるように、例えば $1+1>2$ にするような学校経営力である。かつ、管理職が代わった後も、そうした研究の機運が学校にみなぎり、研究を推進しようとする教師側からのボトムアップの姿勢づくりである。管理職は、個々の教師の声を受け止めつつ、中長期を見通した教育課題に立ち向かう方策を打ち出していかなければならない。管理職の企画力や構想力や見識である。そのため、学校が元気であってほしいし、子どもや保護者、地域もそれを願っている。一般教職員はもちろんのこと、管理職も元気であることが何よりである。しかし、ここに気になる調査結果がある。

全国公立学校教頭会調べ（日本教育新聞、平成 27 年 1 月 12 日）によると、副校長・教頭の 9 割が職務を通した心身の疲れを実感しており、1 割以上が「よく眠れない」状態にあるとの回答である。

あなたが負担(疲労やストレス)に感じる職務は何ですか？(複数回答可)



(日本教育新聞 平成 27 年 1 月 12 日)

この調査から、小中学校において、3 割を超える副校長・教頭が、職場の人間関係づくりからのストレスを感じていることや、校長との人間関係において、1 割弱の副校長・教頭がストレスを感じているとの回答していることがわかる。

本来、学校では、友達同士のかかわり方や人間関係づくりに適切な指導を担うべき学校の“要”がこのようにストレスを感じていては、指導の効果もなかなか期待しにくい。

子どもは、教師の顔色をよくよく見ている。いや、子どもだけではあるまい。

保護者や地域は、学校内の教職員の様子について情報交換していることもある。よい情報なら歓迎したいが、負のイメージはいただけない。PTA、地域等との連携にかかわる調査結果から、ストレスを感じているとの回答が 3 割を超える数値を PTA や地域はどのようにとらえるであろうか。

また、別の調査であるが、文部科学省が平成 27 年 1 月 30 日に公表した「公立学校教職員人事行政調査」では、希望降任制度に関して、9 名の校長、107 名の副校長・教頭、157 名の主幹教諭が利用していることがわかった。

一方で、公的年金支給の年齢が引き上げられたことに伴い、教職員の再任用が増加している。多忙さゆえになり手が少ない副校長を希望する定年退職校長がどれだけ手を挙げるであろうか。

心身の疲れがとれないまま再任用となると、教育効果も見だしにくい。

英語教育や道徳の教科化も重要な課題ではあるが、それを推進する学校の元気と活力を生み出していくのかを考えなければ、教育改革も単なるビジョンで終わってしまう。

子どもの学習意欲もそうだが、教職員の指導意欲や管理職の経営意欲も心身の健康が基本である。

では、学校現場の疲弊感を元気にするには何が必要か。

その一つは、教職員の心身のリフレッシュである。教職員が暗い顔をしていては子ども達の心を明るくすることはできません。子ども達の元気は教職員の笑顔が何よりである。管理職も同様で、たとえ短時間

であっても書に親しんだり歴史探訪などの趣味をもち、僅かの時間でも気分転換を図り心身の充電に心がかることが肝要である。管理職としての自分探しも時として大切にしたい。

名言「こころの耕し（順斎）」が脳裏に浮かんでくる。

こころの耕し（順斎）

- 一、体力が気力を生む
 - 早寝早起きをすること
 - よく歩くこと
- 二、気力が決心を育てる
 - 黙思黙想をすること
 - 我慢すること
- 三、対処する力が積極性を生む
 - 嫌なことに進んで挑むこと
 - やりかけたことは最後までやりぬくこと
- 四、積極的な人生観が道を切り開く
 - 先頭に立つ勇氣を持つこと
 - 自分が燃えて周りを照らすこと

（引用：「<やる気>を引き出す・<やる気>を育てる」人間教育研究協議会編 2012年8月25日金子書房『<やる気>の教育心理学のために』梶田叡一 p.011、（注）順斎の講話内容を静岡中高等学校教頭渡邊泰夫先生がまとめたもの）

やる気の源は、元気であり勇氣であり根気である。

2 日本教育実践方法学会に願いを込めて

さて、子どもの「やる気」について、学校教育では、授業時の教師の発問や教材提示、また、導入・展開・まとめといった授業過程の工夫が研究されてきている。子どもの固定的な見方や既成概念的な考え方に揺さぶりをかけるなどし、課題意識をもたせ追究心を高めていくなどである。教科ごとの研究はなされてきてはいるが、教科の枠組みを超え長期を見通した子どもの「やる気」についての問題をこれから検討する必要がある。

梶田叡一先生の言葉が胸を打つ。

「最終的には、『やるべきことはやる』という実直な姿勢が身に付いていくことが望まれる。学習課題は、その全てが必ず『面白い』わけでも、『やりがいがある』ものでも、『大事さがわかる』ものでもない。しかしやるべきことはやらなくてはならないのである。・・・楽なこと面白いことばかりを追い求める安易な（防衛的な）姿勢でなく、面白くなくても困難

なことでもやるべきことはやるという積極的立ち向かいの（対処的な）姿勢が育ってほしいものである。」

（引用：「<やる気>を引き出す・<やる気>を育てる」人間教育研究協議会編 2012年8月25日金子書房『<やる気>の教育心理学のために』梶田叡一 p.009）

私は、子ども自身が本気モードで「やる気」を出し、自らの生き方に重ねながら学習していく姿を求め、本学会において、教科等の枠組みを超えたところで学会員の方々と議論し検討してみたいと考えている。

私の考える教師像とは、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組み、教師としての自己の生き方を考えることができるようにする」である。

総合的な学習の時間の目標を教師としても身をもって実践し、やるときはやらねばならないのである。

本学会会長であり関西福祉大学長である加藤明先生と長くお付き合いをさせていただいているが、10年以上も前に心に残る一言を聞いた。

「問われているのは指導者の企画力、構想力と見識である。教師は学び続ける学習主体者でなければならない」と。

この言葉は、「総合的な学習の基礎・基本—評価規準による自立への挑戦—」（加藤明著 明治図書平成14年2月）のあとがきに、エピソードを交えて記されている。

3 現実的な視点で子どもの「やる気」を考える

本学会は、立ち上がったばかりのびかびかの学会ではあるが、熱い思いをもった同士がしっかりと議論し合い、従前の研究とは少し違った視点から子どもの「やる気」の問題を検討していくことができれば幸いである。

そのためにも学会員一人ひとりが元気で子どもや保護者に笑顔で向き合い、かかわっていくことを切に願っている。

学校現場では、経験豊富な教師の退職が続き、若手の教師が増えている。先輩教員に学びたくても身近なところになくて困っているといった状況もある。

そのような中で、ともに考えを述べ合いながら、教育課題に対する“問い”へのヒントを掴んでもらえれば、嬉しい限りである。